

今後も資料の発掘に努めていきたい。

1) (札幌市吉田病院)

2) 3) (札幌市)

4) (弘前大学医学部麻酔科)

14 Anesthesia の命名

中原 泉

Anesthesia の名称は、Oliver Wendell Holmes (一八〇九—一九四) によって命名された、というのが定説とされている。しかし、この命名の由来やその内容に関しては、詳らかではない。

一八四六年十月十五日、歯科医師 W. T. G. Morton (一八一九—一六八) は、ボストンのマサチューセッツ総合病院 (M. G. H.) において、硫黄エーテルを用いて全身麻酔に成功した。

この新法の開発は、またたく間に全米に広まり、欧州に伝播した。十二月十日はやくもロンドンで、歯科医師 James Robinson が抜歯手術に応用、二十一日には著名な外科医 Robert Liston が大腿部の切除手術に用いた。

このように欧米各地で Morton の無痛法の追試が相次ぐ前、公開手術から数えて三十六日後の十一月二十一日、Holmes はポストンで一通の書簡を記し、Morton に送った。

文中、彼はエーテルによって生ずる無感覚の状態に、適切な名称をつけることを提案した。実に、Morton の無痛法が登場するまで、いわゆる「Anaesthesia 麻酔」という言葉はなかったのである。こうした定義を必要とする意識の喪失状態は、(それまで存在しなかったので) 誰も知らなかったからだ。

Holmes は、MGH につとめる医師で、詩人としても知られていた。彼は Morton の公開手術に立会い、その麻酔施術を目撃し、彼の絶対的な支持者となった。そのとき Morton 二十七歳、Holmes は三十七歳であった。

やがて中傷と誹謗の渦中に陥った Morton を、彼は私心なく心情をこめて、次のように擁護した。

「その効果の可能性にかかるアイデアを受け入れられなくても、Morton 博士は勇氣と不屈の努力をもって、彼の評価を賭して最初の決定的な実験を断行したことは、全く

反論の余地のない周知の事実である。

その結果に辿りつくまで、世界は何世紀もあるいは限りなく待たされたのかもしれないのだ。Morton 博士はその発見によって利益を得るかわりに、それに捧げた労苦と時間の結果として、彼の心と身体、そして財産に痛手をこうむったことはよく知られている。

私は Morton 博士ととくに関係はないし、主義や意見のうえからも、私に偏見をもたせるような彼と共通の趣味も持たない。しかし、他の国の人々が彼らの恩人たちに対し、私たちがどのような仕打ちをしてきたかを思いださせたり、またこの豊かに繁栄している私たちの国にゆとりがなく、たとえ妥当な根拠があろうとも、私たちが恩人たちに十分に感謝する心を持ちあわせていないとは信じたくない。(後略)」(Isaac F. Morse に宛てた書簡)

さらに Holmes は、全身麻酔による手術患者の安らぎを詩的に謳いあげ、その奇跡のような効用を讚美した。

「メスは患部を捜し求め、滑車は偏位した肢を牽引している。

自然の創ったもつとも未熟な生きものに対し、もつとも

烈しい苦難を宣告する原始的な呪いを自然自身が作りだす。

しかし、おおっている極度の不快は、忘却の水に浸ってしまった。

そして苦悶で節くれだった額の深い溝は、いつまでもスミーズになった。」(ボストンの医学校における挨拶)

この Morton の信奉者の書簡は、一八四七年五月三十日、Edward Warren に於て「Some Account of The LETHAON」(ボストン刊)に収載された。

(日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館)

15 華岡青洲の麻醉薬通仙散に関する 実験的研究

松木明知

文化元年(一八〇四)十月十三日、紀州の華岡青洲は、大和五条村の藍屋かんに対する乳癌の手術を、彼が開発した通仙散(一名麻沸湯)を用いた全身麻醉下に敢行した。この事績は、日本の医学史の中でも特筆される業績であり、もちろん青洲の事績の中でも最大のものと言えよう。

青洲に関する研究としては、従来系譜的研究、学統の研究、弟子の研究、著述の研究、さらには通仙散開発の経過の研究など多岐にわたったが、通仙散それ自身に関する実験的研究は殆ど知られていない。

演者は、青洲と同じ処方に通仙散を製し、ウサギ、犬などに投与して、果して麻醉効果があるか否かを検討し併せて、従来問題になっている華佗の麻沸散の主要成分にされ